

平成 23 年 6 月

[配布先：全組合員]

市場情報

「日 時」 平成 23 年 6 月 10 日（金） 11 時 30 分～

「場 所」 名古屋 「キャッスルプラザホテル」 B 1

「出 席」 酒 匂 委員長他 16 名(最終頁参照)

「経 過」

1. 酒匂委員長挨拶

歯を食いしばり難局を乗り越えよう

前回の委員会(3月10日)を開催した翌日に東日本大震災が発生したが、以来、被災された方々のご苦勞は誠に大変であったことと察する。これからも憂鬱なことが続くと思うが何とか乗り越えていただきたい。本日は甚大な被害を受けられたJFE鋼材・仙台工場の庄子委員にご出席いただいているが、委員の元気そうなお顔を拝見し、ほっとしている。

我々シャー業を取り巻く情勢も、震災を境に一変した。とりわけ回復途上にあつた自動車、建産機など製造業部門に激震が走つた。しかし、予想以上に早く部品調達の目処が立ち、乗用車、トラック生産が6月から本格的に再開し、建産機も足元震災前のレベルまで戻しつつある機種があり、7月以降は、電力供給ネックなど不安要因もあるが、各メーカーとも一斉に増産計画を打ち出している。一方、橋梁・鉄骨需要は全国的に不振が続き、本年度の受注予想も前年度比横ばいの低位継続が見込まれており、厳しい1年となりそうだ。これらの状況を踏まえて、皆で歯を食いしばってこの難局を乗り越えよう。

2. 各地区の需要動向

北海道

一転、後退局面へ

桜花爛漫。花々が遅い春を待ち侘びていたかのように一斉に咲き誇る。次々と目を楽しませてくれた花の季節から、目に鮮やかな新緑のもとライラックまつりやよさこいソーラン祭り、北海道神宮祭典と、待ち侘びた清々しい初夏を迎えた。

道内の景気は、公共投資や食料基地としての農業関連大型予算の配分。民間の首都圏鐵骨の道内ファブ受注。加えて、夏場以降には道央圏の大型案件も期待され明るい兆しが見えていた。

しかし、'08年の100年に一度といわれたリーマン・ショックの傷跡も完全に癒えていない'11年3月11日。今度は突然 1,000 年に一度と言われる東日本大震災に見舞われた。

これに伴う自粛ムードの中、消費マインドの冷え込みが急速に鮮明となった。さらに、相変わらずの政局混迷も足を引っ張る格好で、景気は回復基調から一転し後退傾向が強まった。

当然、地場の建設需要も震災の影響により、新規発注の工事中止や延期、規模縮小などが予想され極めて暗い影を投げかけている。

【鉄骨】建築着工統計による'11年1～3月累計は 22,800 トン(前年 23,400 トン)で、対前年同期比 2.6%減となった。

需要の先行指標となる1～5月の北海道機械工業会鐵骨部会道央支部の共同積算累計数量は、合計 49,491 トンで前年実績(1～5月 44,994 トン)に比べ 10%上回ったが、平年比では 56%の水準となっている。

同鐵骨部会道央支部がまとめた'10年度の鐵骨積算数量は 113,180 トンで、'94年度以来最低だった'09年度(87,850 トン)に比べ、28.8%増と回復した。ただ、過去 5年間平均値でみると 70%程度にとどまった。

'11年度も東日本大震災などの影響により、'09年度レベルで推移するとの見方が強く、道内における市場規模の縮小が懸念されている。

ちなみに、建築統計に基づく'10年度の鐵骨需要量は、11,944 トンで前年同期実績の 126,967 トンに比べ 12.6%下回った。

新年度に入り耐震補強関連などが一部で見受けられるものの、全体的に新規案件は少なく低迷した状況が続いている。首都圏の物件も市況が冷え込んでいることから、道内業者が手を出せない状況にある。

業界関係者が 3 人寄れば、*低迷を続ける鐵骨需要、過去最低の数量になるのでは。*鋼材価格の大幅な値上げに対し、鐵骨単価は低迷し安く赤字操業。*震災と原発の影響はいつま

で続く。・・・鉄骨業界が消滅するような厳しい話題ばかり。

一日も早く、どんどんお金を使って(金は天下の回り物)、経済を活性化させて欲しいものである。

【橋梁】期待されたゼロ国債・補正予算による発注は、ほぼ昨年並みと見事に期待はずれ。今年度中の総発注数量は、20,000ト、想定され前年度に比べ60%アップが見込まれている。しかしながら需要環境は依然として厳しい状況に変わらない。老朽化の進んだ橋の延命・耐震対策や補修・補強としての落橋防止装置や鋼製床版工事などと共に早期発注が切に望まれている。

【切板】昨年、先送りされた農業基盤整備・農業関連設備計画はようやく動き出したが、道央圏の大型プロジェクトについては今年も動きそうにない。

需要構造の主体である建築鉄骨と橋梁は、ともに回復の見込みが薄く、物件の小型化もあって少ロット多品種・小物・型や異型が中心となっており、納期は短縮傾向にある。

首都圏物件を加工する一部有力ファブを除き工場の稼働率は30%～90%。M・Rグレードの需要、とりわけ地方の新規案件が少ない。先行きの見通しも不透明で、各社とも低操業を余儀なくされている。需要期に向け、早くも数量的な枯渇感は顕著となって表れており、一段と深刻度が増すものと憂慮されている。

切板価格は、本格的に値上げに取り組みなければならない時期となっている。ゼネコンの受注競争が依然厳しいため鉄骨価格は、相変わらず低価格で推移しておりファブへの指値は極めて厳しい。高炉厚板価格大幅な上昇と、切板の上昇価格には相当格差がみられる。また、電炉の厚板価格値下げによって切板の値上げが見送られ気味で、さらに採算は悪化することが予想され深刻な事態に陥っている。

高炉メーカーは、鉄鉱石や原料炭を含む資源の大幅な高騰。さらに、国際市況の先高間から厚板価格を3月契約から大幅値上げを実施した。

内需色の強い建築投資は、依然低迷しており復調の兆しが見えない。需要不振の状況下、需要家には切板の製品価格に対する理解を粘り強く求めていくが、価格の転嫁にはゼネコンやファブの強力な抵抗がある。

シャリング業者は、需要家と十分な対話を重ねながら適正な価格での販売に不退転の決意で挑んでいる。今年は東日本大震災の影響もあるだけに、昨年のように「値上げ頓挫」の二の舞になることは無いと思われる。各高炉メーカーには、ゼネコンやファブに対する厚板値上げの足並みを揃え、ともに強い交渉を続けていかないと理解は得られない。なお一層のご協力ご支援をお願いしたい。

(玉造・西村卓也)

東 北

市場が消えた

先の震災により、被災地周辺の市場そのものが消えてしまったような喪失感が強い。今は塩漬け在庫の処分に躍起になっている。大半がスクラップで、敷板で捌けるのは一部のサイズだけだ。あたりの瓦礫撤去も全く進んでいない状況で、復興需要が見えてくるのはその先。早くて来春頃からではないか。それまで何とか食いつなぐしかないと思っている。財源問題を早くどうにかしないと、いつまで待っても案件は何一つ出てこない。

(J F E 鋼材・庄子悟)

東 京

鉄骨需要、急減

【全 体】

10～12月までは鉄骨需要に支えられ、稼働率も100%を超えるレベルで推移したが、1月以降徐々に低下し、足元非常に厳しい状況が続いている。

今後の動向は、橋梁・鉄骨とも低位横ばいの見通しであることに加え、東日本大震災の復旧・復興需要についても、現時点では、規模・時期とも不透明であり、建材系シャーの稼働率はさらに落ち込む見込み。既に臨時休業を実施している会社もあり、低稼働対策が急務である。

【橋 梁】

22年度の橋梁発注量は、28万トン前後と前年度の31万トンをさらに下回り、低位横ばいを継続。加えて、関東ファブの落札状況が芳しくないため、シャー加工量は半減の状態に落ち込み、過去にない低レベルの操業が続いている。

また、23年度の橋梁発注量は、前年度横ばいの28万トン程度と、引続き低レベルが予想される。1Qについては、ファブの昨年度4Qの落札案件の前倒し生産（足元の低稼働対策、及び夏季電力制限対策等）により各社の加工量は若干持ち直す見込み。一方2Qの加工量については、1Qの入札案件が例年に比べ低位であることや、夏季電力制限を受け、関東圏ファブを中心に稼働減が見込まれることから、減少が予想される。

【鉄 骨】

22年度の鉄骨需要量は、418万トンと前年度を7%下回り、低位横ばいの状況に変化は見られない。首都圏大型案件も、9月～12月にかけて各ファブともオーバーフローするほどのピークを迎えたが、今年1月以降は一気にピー

クアウトし、大幅に減少した。

23年度の鉄骨需要量は、前年度横ばいと引続き低レベルが予想されている。用途別に見ても、倉庫・店舗・学校案件が増加する一方で、高層ビル案件は減少する見込み。大手ファブの手持ち工事量は、足元2カ月程度。見積り件数も横ばいの状態。

(富士鉄鋼センター・三浦潔司)

東 京

建産機、明るさ見え始める

【全体】

製造業は、大震災の影響により、一時的に操業停止に追い込まれた後も、サプライチェーン寸断で暫くの間大減産を強いられた。店売り分野においても、企業設備投資の中断・延期など、全般的な様子見ムードから受注不振の状況にある。しかしながら、部品調達網の回復が予定より早く進行していることもあり、6～7月頃生産回復に目処がつきそうで、製造業に限定されるが復興関連需要も相俟って明るさが見え始めている。

【建設機械】

今年3月までは15カ月連続の前年比増と、リーマンショック後順調に回復したが、震災影響により操業停止や生産縮小を余儀なくされ、関係シャーの加工量は大幅に減少した。

その後の状況は一様ではないが、需要家各社は、4～6月の減産分を、部品調達の本格的回復が見込める6～7月以降で挽回する生産計画を立てている。今後、節電対応もあり、部品が円滑に入荷するのかどうか、暫く状況を注視する必要がある。

①油圧ショベル

主にエンジンの入荷不足による減産が続いていたが、5月中旬以降フル生産に入った機種もあり、全体的に当初見込みより早い回復となりそう。復興需要としては現在、小型機種の引合いが急増、順次需要は大型機種に移行すると予想される。

②鉤山機械

大型ダンプは5月までの減産分を上期中に取り戻そうと、6月以降大增産計画。大型ショベルも工場被災の操業停止から回復、現在は本格稼働に入り、高操業。

世界的に鉤山機械は旺盛な需要が続いているため、当分堅調を持続しそうな情勢である。

③建設用クレーン

ラフテレーンの復興需要関連の引合い・受注が増加。残念ながら生産が本格化する6月以降までは、製品出荷が満足にできない状態。6月以降は現在の受注急増を反映し、リーマンショック前の約80%程度の生産計画となっている。

クローラクレーンは国内・輸出とも低迷が続く。復興需要もインフラ整備の本格化する来年以降か。

【重電】

原発事故により、国内案件はすべて中断するも、米国向け案件は、11年～12年で計4基の受注があり、長期の安定加工が見込まれる。同時に、火力発電所の増設・再稼働の関連受注や変圧器・緊急電源装置なども大幅に受注が増加している。

【板金・鍛圧機械】

ベンダー、タレパン等板金機械の生産回復は早く、4月から震災前の水準まで戻っている模様。プレスは自動車向け個別機が低迷しているものの、汎用機はまざまざのレベルを維持。この分野は総じてピーク時の60～70%の生産が続いている。

【トラック・トレーラー】

トラックは、6月から震災前の90%程度まで戻りそう。トレーラーは、重機・非常電源等々の積載用として、小型ダンプは瓦礫撤去用として復興目的の受注が急増。

【産機店売り】

震災後、受注減が続き、5月連休明けからはさらに悪化、一部の需要家で受注増加がみられても単発で終了。また復興需要関連の引合いはあるものの、受注に結び付くのは相当先と思われる。仕事量の減少と鋼材単価の二極化・多極化でベンチマークの無い見積りのケースが増え、状況は深刻である。

(ニューエイジ・池田啓志)

東 京

その日暮らしの状況

浦安地区のプロパーの状況は、5月連休明け後が最悪で、その日暮らしの状態が続いている。物件が先送りされるなど、5月の引き合いは頭打ち、足踏みの状態で、6月以降も販売減少、在庫増加の悪いパターンが続きそうであり、先々が非常に不安である。

(三ノ橋鋼材・角田善彦)

東 海

橋梁・鉄骨とも低調

建材関連需要は、橋梁・鉄骨とも低調のまま推移している。小ロット・短納期者が中心。在庫は増加傾向。震災関連の引合いあるも契約には至っていない。

(中部鋼鉄・南 信年)

東 海

震災の影響を受けて

3月から5月の産建機向けヒモ付き・店売りシャーの動向は、全体感として、東日本大震災前は、リーマンショックから立ち直りを見せ、仕事量も増え、雇用調整金をもらう会社も減り、材料の高騰などの不透明感があったが、少しは期待感が台頭しつつあった。しかし、3月11日に起こった震災の影響を受けて明らかに変わった。各社とも震災による工場建屋や機械に対しての影響はなかったが、ユーザーの部品調達が間に合わず、生産の延期やキャンセルが出た。直接的には溶断業とは関係がないが、中部地区が一番大きな影響を受ける名古屋本社の自動車会社を例にとると、震災前は、日当生産が1万4000台だったのが、震災後から5月が、段階的に生産を上げていき、日当3~4000台から始まり、6月に入り、1万2000台を予定、また7月は1万3500~4000台と震災前に戻る予定で、10月には1万7500台を予定しており、急激な回復を目指している。ヒモ付きシャーの需要分野ごとの状況を整理すると以下のとおりである。

【建機】

- ①リフト 震災直後は、部品不足による一時生産中止により、全く仕事がなくなり、5月いっぱいまでは雇用調整金をもらっていたが、5月中旬より仕事が戻り、6月以降、震災前の日当230台に回復していくとのことなので徐々に忙しくなると思われる。
- ②クレーン あるメーカーは、震災の影響を受けておらず、3月時点で北米向けクローラ

ルクレーンが止まったのは、5月になっても変わっていないが、以前、円高の影響を受けて、きまっではいなかったインドやタイなど新興国向けのクローラーのクレーンが単価の皆をしを受けて決定し、注文が出てくるようになった。またもう一方のメーカーでは、相変わらず、国内外とも忙しく、4月中旬までは震災の影響を受けたが、それ以降はフル生産に戻り、再び忙しい状態にあるようだ。

③トラック 震災以前は忙しかったが、震災の影響で部品不足が出て、元の生産が止まったり、またシャーシがないため、荷台製作者は材料があっても作れない時期があったが、メーカーが5月からフル生産に戻り、元々忙しかったことに加え、震災で3000台のトラックが流されたこともあり、これからも忙しい状況が続くものとみられる。

【産機】

①鍛圧 4月はやはり震災の影響を受けて、生産が止まり、雇用調整金を申請して凌いでいたが、元々大型・小型は輸出物件を中心に好調だったため、5月に入り回復してきた。5月は新興国向けの自動車用やIT関係の小型プレスが多く出た。

②IT関係他 IT関係の専用機は震災の影響で部品不足となり、4月はゼロ、5月は半分戻ったが、6月に入っても震災前の5～6割の生産レベルにとどまっている。中国向け太陽光パネルを作る専用機は、3月の時点では好調で、年内は仕事があると言っていたが、震災と原発の関係で、4月に入ると円高や中国の金融規制により、全く仕事がなくなってしまった。

【造船】

①デッキクレーン 足の長い製作物なので、製品在庫もあり、材料の切断時点では、震災の影響も受けず、好調を維持している。

【昇降機】

3月の終わりから4月にかけて生産中止があったが、本来受注生産のため、ある程度部品在庫は持っており、4月下旬より震災前の生産レベルに戻った。5～6階用の汎用型の昇降機は相変わらず不調が続いているが、秋からは輸出向けの大型昇降機が出てくる予定である。

【鉄道車両】

1両の車両を製造するのに長い時間がかかるので、車両製作段階、特に溶断をする時点では全く震災の影響は受けなかった。ただ構内向けの車両は6月中に生産を終了して、7月からは3月の時点で決定した米国向けの車両に切替える予定で、相変わらず高水準の生産が続くとみられる。

以上がヒモ付きシャーの個々の情報であるが、一部のジャンルを除き、徐々に回復しつつあるとはいえ、この震災で少なからずダメージを受けた。経費等の削減やユーザーの生産回復により、3月時点では各ヒモ付きシャーは多少の希望を持っていたが、震災後はユーザーの生産停止により、仕事がなくなり、情報収集をする毎日が続き、雇用調整金の申請を再び始めるなど、不安な毎日が続いた。上述した通り、自動車メーカーも予想以上に早い生産回復が見込まれ、ここにきて、明るい材料が増えてきたことは大変喜ばしいことである。

一方、店売りシャーは、震災直後は復旧需要などの話が出て、材料の先高感もあり、3月は良い成績を残した会社もあったが、4月から徐々に仕事が落ち始め、6月に入ったら、その日暮らしが精一杯という会社も増えてきた。その仕事のなさが災いしたことや、電炉の母材値下げにより、折角適正価格を目指していたのに、再び過当競争が始まり、ヒモ付きシャーが仕事を確保し始めたこととは逆に、苦しい状況になっている。ただ、6月に入り、震災により一時ストップしていた市中の仕事も徐々に始めていることもあり、秋口からは少し期待が持てる面もある。

以上、3月から5月の東海地区のシャー業の状況を報告したが、我々は東日本の震災被災地の方々や同業者に比べると本当に幸せな日常生活を送っていると思う。この3ヶ月間テレビなどの報道を見ていると、その状況の凄惨さや悲惨さには目を覆うばかりで、巨大地震や大津波、原発の被害を受けられた方々に対し心よりお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

いまは政府の状態が悪く、また、原発等の影響があり、復旧復興が全然進まない状態である。もし、それに向けての話が出てきたときには、東海地区シャー業者一同、一生懸命頑張りたいと思っている。

(鈴木鋼材・鈴木康司)

(注) 6月号『情報』の誌上において、本稿の誤字脱字等が多数ありましたことを事務局編集サイドとしてここに改めて深謝いたします。

大 阪

橋梁・鉄骨、低位のまま

【全般】

①需要 3月11日に発生した東日本大震災以降、需要動向が様変わりし、年初から徐々に回復基調を辿ったが、いきなり荷動き・引き合いが止まった。②在庫 3月末は、値上げ前の玉や期末に向けての買い増し等があり、若干増加。4月末は、震災の影響でメーカーデリバリー遅れにより3月分が入荷、微増。全体的に購入量は増えておらず、出荷量が減少し低位に推移。在庫率のみ上昇。価格にかかわらず買い意欲はない模様。

③与信リスク 今後、建機向けは増産の見通しとなっているが、その他分野は先行き府とお目意であり、仕事確保ができない状況である。体力のない中小のファブヤシャー会社にとって、仕事減と材料価格の上昇をいかに乗り切るか、最大の課題に直面している。商社筋からは、社内的に与信を厳しくチェックすることが求められているという声が聞かれ、与信リスクに対する関心が高まっている。

【需要部門】

①橋梁

22年度の橋梁発注量は、約25万トンでほぼ見込み通りであった（21年度は30万トン弱）。23年度も、概ね22年度同じ数量を予想している。既に約18万トンの発注予定も決まっている昨年同様の数量であれば、引続き橋梁向けの仕事は低位になると予想される。

一部の手持ち仕事を確保しているファブを除き、ほとんどの関西ファブが前年度の受注部県を23年度上期中に製作する工程になっており、下期の仕事確保の見通しは立っていない。4～6月の入札の開札が少なかった。7月以降の開札に期待したい。切板発注量は、4～6月は期待したほど出していない模様。

②鉄骨

関西では、引続き大型物件を除く中小物件が少なく、ゼネコンの請負価格も下がっている模様。鉄骨ファブは、少ない案件を確保しようと取り合いの状況が続いている。こうした背景もあり、鉄骨向けの切る板は、量の確保も採算面も厳しい局面が続いている。昨年度は数カ月間、工場稼働を休止するファブがあったが、仕事が確保できない場合は、そういった事態が繰り返されることも考えられる。

③建機

部品不足により、一時生産がストップしていたが、徐々に回復。6月はフル操業。7月以

降増産体制になる。

④産機

当初思ったほど落ち込みもなく推移したが、部品不足の影響がプレスや工作機械にも出てきて急降下。輸出向け中心に減少している。

(日鉄神鋼シャーリング・木村秀明)

(玉造・棚橋浩司)

九州

不安定要因抱える建産機

【産機】 3月以降、4月までは産業機械、建設機械向けは、1～2月との比較では上向きに推移していたが、為替の不安定な動き、海外競争力の低下、また震災の影響によりキャンセルや無期延期が相次ぎ、5月連休後より引き合いが極端に減少し、荷動きも停滞している。また、海外調達も加速し、海外調達ルートが固まりつつある。機械メーカー協力企業の情報に用途、海外調達比率が60%、国内比率が40%で、海外調達品の品質はかなり向上していることである。一部の部品製造業において、震災復興に係る受注は増加している模様。液晶（真空装置）関係は、3D、有機EL等がソフト開発面で一段落しているが、携帯電話（画面）等の真空装置製造は依然好調である。全般的に、一部電炉メーカーの販価引き下げ発表や、震災の影響で引き合いが少なくなっていることから、ここに来て九州地区の価格トレンドは急激に下向きになってきている。一部企業においては、受注し、工程スケジュールまで確定した案件をキャンセルするケースや、また、部品調達ができず、一定期間閉鎖する工場も出てきており、さらに、環境は厳しくなっている。

【建機】

小型建機メーカーでは、リーマン破綻前の生産台数に迫りつつあるが、一部の機種については部品調達が依然遅れている模様。また、建機メーカーの協力企業では、震災以降に緊急受注し、完成しているものの、出荷持ち込み場所が明確になっていないため、工場内在庫となっている。一方大型建機メーカーの協力企業は、3～4月と受注量も大幅に減少していたが、5月以降、生産台数は増加傾向を辿っている。

(門倉剪断工業・白水正幸)

九 州

低迷続く建設関連需要

【造船】

船種・船型によりややまだら模様であるが、全体的には受注残が減少傾向にあるものの、高水準の操業が続いている。上場造船10社の3月末時点の受注残は2240万総トンで、2.4年分の受注残となっている。

【建産機】

震災関連のガスタービン廻りの受注や電力関連での緊急受注などが一部にみられるものの、設備投資関連全体では、5月以降急速に需要が萎縮してきている。どの時期にどの分野にどの程度の投資をすべきか判断が難しいものと思われる。但し輸出関連向け大手の工場建設は予定通り、着々と建設がスタートしている。

また、建機の立ち直りは思った以上に早く、5月から昨年を上回る生産を予定している会社もある。ただ不確定要因としては、電力会社からの節電要請があった時には計画が達成できない可能性もある。

【建築】

工場建設や病院建設を中心に大手ファブはそこそこ仕事が埋まっているものの、中小ファブでは稼働率50%を下回る会社も多く、需要低迷が続く中資金繰りが窮屈になり、今後与信問題が懸念される。

【土木】

足元の受注が落ち込んでおり、今年度の九州地区は大幅な減少が予想される。九州地区の公共工事請負額は、22年度は前年比8.1%減で、4～5月は同14%減となっている。

溶断業界は、年初から3～4月までは高炉メーカーの値上げ基調によりやや好調であったが、足元の受注減が響き、また電炉の値下げ発表により業況は急速に悪化している。

(豊鋼材工業・橋本勝美)

3. 高木理事長の感想

委員から各地区の報告を聞いて、震災後 3 カ月が経過し、マーケットの様変わりの状態が実感できた。足元の需要は、製造業を中心に再び回復過程に復する動きを示しているものの、全体からみれば、回復スピードはかなり遅いと言わざるを得ない。去る 6 月 6 日、コイルセクタ工業会の 30 周年記念講演会において、新日鉄の三村会長は、「平成 15 年の鉄鋼流通団体の新年賀詞交歓会で、『内需依存型の産業である今の鉄鋼流通加工業界はプレイヤーが多すぎる。これを淘汰しないと将来の健全な発展は望めない。』と耳の痛い厳しい提言をしたが、現時点においても私のこの認識は変わっていない。とくに建設内需は内包している多くの構造的問題を解決しないと明日はない。」と指摘している。

また、ある商社の会合の中で、内需主体の流通加工部隊はどう生きていくか、小さなパイを分かち合うしかない。その 1 案として、家業としてやっている会社同士が、色々な形のアライアンスを形成し、オペレーションは第三者に委託する方法もあるとの話があった。われわれシャープ業は、流通加工業の一員として、今後飯を食うためには、1～2年のうちに、何らかの手を打たないと共倒れする惧れがある。これは当業界が直面する大きな課題であろう。

(参考) ≡ 出席者 ≡ (順不同敬称略)

委員長・ 酒匂 (京浜産業)
ゲスト・ 高木 (理事長)
〃 ・ 林 (東海支部長)
東 北・ 庄子 (J F E 鋼材)
東 京・ 池田 (ニューエイジ)、
角田 (三ノ橋鋼材)
三浦 (富士鉄鋼センター)、
東 海・ 鈴木 (鈴将鋼材)
南 (中部鋼鉄)
長谷川 (鬼頭鋼材・ゲスト)
堀場 (三和鉄鋼・ゲスト)
大 阪・ 木村 (日鉄神鋼シャーリング)
棚橋 (玉造)
九 州・ 白水 (門倉剪断工業)
橋本 (豊鋼材工業)
事務局・ 柘野

4. 次回開催日程

第 1 5 0 回市場委員会

平成 2 3 年 9 月 9 日 (金) 正午 ~

京・鉄鋼会館 8 0 3 号室

於 東

以 上